キジムナー　–　説話と由来を巡る考察

目次

はじめに

［Ⅰ］キジムナーとはなにか

１・キジムナーに関する説話
２・キジムナーの身体的特徴

［Ⅱ］キジムナー説話を巡って

１・目玉とキジムナー
２・火の玉、ヨーカビとキジムナー
３・魔除けとキジムナー
４・魂をとるキジムナー

［Ⅲ］沖縄周辺地域を巡って

１・ケンムン（奄美大島）
２・マジムン（宮古島）

［Ⅳ］キジムナーの由来、過去と現在

１・琉球弧の神信仰
２・ムン
３・災因論
４・山の神
５・屋敷と樹とキジムナー

まとめ

はじめに

本稿は、沖縄を中心とした南西諸島に伝わる木の精霊「キジムナー（キジムン）」が沖縄においてどのような存在であるかを資料をもとに整理し、さらに他地域との比較を通して、その起源と遍歴をたどることを目的にしている。

今日、一般的に「キジムナー」がどういうものか記述される際には、ガジュマルなどの古い大木に住む、いたずら好きの子供の精霊という言い方がなされることが多い。すなわち、現代においては一般的に「キジムナー」には親しみやすい妖怪としてのイメージしか付与されていない。各種観光パンフレットではキャラクター化されたキジムナーが我々にほほえみかけ、国道沿いにはシートベルト着用を促す警察官キジムナーがドライバーを監視し、大宜味村などではブナガヤ（キジムナー）の里として、キジムナーが町おこしを買って出ている。

キジムナーを紹介する新聞記事はこんな感じで心やさしい妖怪を演出しようとする。

> 語り継がれるキジムナー　優しい妖怪
>
> 僕はキジムナー。
>
> 古くから沖縄に伝わる妖怪（ようかい）だといわれる。可愛い妖精（ようせい）だと言ってくれる人もいる。架空のものではなく、実在する未確認の動物だと主張する人もいる。
>
> どうにもえたいが知れない。
>
> 実のところは僕自身にも、僕が一体何者なのか分からない。
>
> とはいえ、昔から「僕を見た」という目撃談は絶えない。そのつど僕は、沖縄の人々をおそれさせたり、喜ばせたりしてきた。[1)]

だが、ひとたび『沖縄民俗』などにおいてキジムナーの項をひもとくならば「心優しい妖怪」であるキジムンの印象は一変するだろう。キジムナーから富を与えてもらっていたにもかかわらず、それを裏切ってしまった人間たちは、キジムナーによって目玉をつぶされたり、妻子を焼き殺されたり、あるいは命を奪われる。そこから立ち上がってくるキジムナーのイメージは、自分を裏切った人間に対して激怒し、目をつぶして盲目にし、子孫に呪いを与え、その妻子を焼き殺し、ときに人の命を奪うという「悪霊」そのものである。

そもそもキジムンの「ムン」は、魔物、すなわち「マジムン」の「ムン」であり、その「ムン」は、酒井の言に従えば「人を病気にしたり、不幸に導いたり、死をもたらしたりする」、「暗の霊魂」である。[2)]

本来キジムナーとは沖縄においてどのような存在だったのだろう。そして、いつごろからキジムナーからそのような恐ろしいイメージが払拭されていったのだろう。

本稿においては、まずはじめにキジムナーに関する主な話を列挙し、その特徴を整理したあと、沖縄周辺のキジムナーに関する話を俯瞰し、過去の文献をもとに南西諸島における「ムン」、悪霊の位置づけを整理する。そして、結論としてキジムナーの時代的変遷と、そこに人々が託した思いを描き出していくことにする。

なお、沖縄本島において「キジムナー」は「キジムン」と発声されることが多く、また

その「ムン」に重要な意味が含まれていると考えられるが、ここではその呼称を「キジムナー」として統一することにする。

（注釈）

１）朝日新聞社　2000 5.20 朝刊　東京版 37 頁。
２）酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』，第一書房、1987 年，299 頁。

［Ｉ］キジムナーとは

この項ではキジムナーに関する話を整理する。一般的にキジムナーに関する話は、「説話」と「キジムナーそのものについて説明するもの」の二つが存在する。
「説話」においては、キジムナーと友達になった人間がキジムナーを裏切ることによってもたらされる不幸について記載されることが多い。一方、「キジムナーそのものについて説明するもの」は、キジムナーの身体的特徴や出現場所について誰かからの「聞き書き」の形で記載されている。

１・キジムナーに関する説話

この項では、キジムナーに関する様々な説話の中でも、物語的要素が強いものについて述べることにする。これらの説話のほとんどに共通する特徴として、キジムナーと仲良くなった人間がキジムナーを裏切ることで不幸になる過程を述べているということが挙げられる。

キジムナーに関する説話の基本形といってもよい話は以下のものである。[1)]

原題：キジムナーを騙して盲になった男
（中頭郡嘉手納町嘉手納・男）

一　昔、仲里間切、真謝村のうすくちゃという家の青年が、家の後にある老樹の根本に巣を作っていた木の精と友達になった。
二　キジムンは雨の日も風の日も休むことなく、夜ごと海にいさりに行ったが、必ず親友の青年と話するといって、一緒に連れて行った。時々なら我慢も出来るが、毎晩、しかも雨や台風の時でもとなると誰でも飽きる。断ったらどんなに大変なことになるかわからないので（青年は）仕方がないので後から追って行った。青年の妻が夫より飽きていた。夫婦で話し合う暇もない。
三　そこで、何とかキジムンとの縁を切った末「キジムンの家を焼けば、キジムンは他のところにうつるかもしれない」と思いつき、青年も、他に考えがなかったので、早くも翌日から、青年は仕事帰りには、茅をかって、老樹の根本に重ねた。こんなにたくさんの茅、どうするのと言って珍しがるキジムンに「冬になったらあんたが寒がるはずと思って」と言って、騙した。何もわからないキジムンは、青年の友達思いに心から喜んで、前よりも青年を海に誘った。その間にも茅は日に日に高くなっていった。
四　ある夜、青年は、家から遠いシーガミと呼ばれている珊瑚礁の先までキジムンといさりに行った。二人が出ている間に、茅に火をつけて、キジムンの巣を焼き払っておくと言って、妻と話してあった。一生懸命に、貝や魚を捕っていたキジムンが、突然、「焦げるにおいがする。これは私の家の焼ける臭い。帰ろう、すぐ帰る

としよう」と言って、青年は思いながら、生返事して、いさりに夢中になっている真似をして、時間を延ばした。二人が家に帰って行ってみたら、思っていたとおり、キジムンの巣は、跡形もなく焼き払われていた。「私の家がなくなって、ここにはいられなくなった。那覇に行ったら安里八幡の庭に双葉の古い木がある、あの木には、まだ主が居ないから、あそこに行ってあの木の主になる。あんた、那覇に来るときには、必ず訪ねてよ」、キジムンはぼんやりして心苦しそうに言った。

五　それから何年か経って、青年は用事があって那覇に行った。来たついでにキジムンの話がうそかほんとか確かめるために安里八幡宮を訪ねた。近くで様子を聞くためにある家に行ってことのいきさつを話した。そしたら、今までおもしろく聞いていた家の主人が突然恐ろしい姿になって立って、囲炉裏に置いてあった燃えさしの細い薪を取ると、すぐ青年の目に突き刺した。わざわざ那覇まで行って思いもつかぬ盲にされた青年の子孫は、目の病気にかかる人が多くなった。

この型を基本形にして沖縄各地では様々なキジムナーが存在している。

キジムナーという妖怪の名称一つとっても、この呼称は地域によって様々に変化する。たとえばそれは、「キジムン」「ヒジムン」（久高島）「マズムン」「マジムン」「アカブサ（赤髪の魔物）」「アカナジャー」「ヒジャー」である。奄美大島の「ケンムン」との関連についても意識しなくてはならないだろう。他地域との関連性については第五章で詳しく考察する。

さて、①の「キジムナーを騙して盲になった男」について詳しく見ていくことにする。

一ではキジムナーという妖怪の存在と、その住処について言及されている。それによれば、「キジムナー」は老木に住処を構え、その木の側の家の青年と友人となっている。この老木については具体的な名称が挙げられることも多く、その際には「ガジマル（ガジュマル）」「ビンギ」「ウスク」が一般的である。また、友人となる青年は老人、あるいは単に人と記述されることも多い。

二ではキジムナーと友人となった人が普段なにをやっているかが述べられる。基本的にはキジムナーが人間を魚捕りに誘うが、この際、キジムナーは魚捕りが上手く、魚の左目だけを食べてあとは人間に渡すので、人間が裕福になっていくと記述されることも多い。ここで注目すべき点は、キジムナーの好物について言及される場合、それは必ず「魚の左目」であるということだ。また、キジムナーと共にいる人が「金持ちになる」という記述を見落とすことは出来ないだろう。

三ではキジムナーとのつきあいが鬱陶しくなった人がその妻とキジムナーと縁を切る方法を考える段である。妻が出てこずに、その人間だけで縁切りの方法を考えるという話形も多い。

そしてその縁切りの方法は大きく分けて以下の三つである。

a　キジムナーの住処である老木を焼き払う
b　キジムナーの苦手な蛸を家の入り口に釣るし、鶏の鳴き真似をする
c　漁に行っているときに、キジムナーの苦手な屁を放つ

そして、四、五ではその結末が記述される。

a の場合には主に三つの結末が存在する。

結末一(a-1）
キジムナーは自分の住処を焼いたのが人間であることとは知らずに住処を去る。だが、数年後、キジムナーの転居先に訪れた人間がキジムナーの住処を焼いた話をすると、聞き手が突然キジムナーの姿になり、人間の目を燃えさしの薪で突き刺して盲目にしてしまう。そしてさらに、以後その家では眼病の者が続くという。

これは例として挙げた①の話である。

結末二(a-2)
キジムナーの住処の木とともに、キジムナーの子供が焼け死んだ。キジムナーは復讐として人間の家を焼き、人間の妻子を焼き殺してしまう。この結末の話は次のとおりである。[2]

島尻郡粟国村

一　キジムンが仲良しの若者の家のうしろにあるウスクの木の根本に住み着き、毎日若者に火種をもらいに来る。
二　キジムンは若者に鍋を借りてはお礼にサラチラやひとでを持ってきて、毎晩のように漁にも誘うようになる。
三　若者の妻はキジムンを嫌い、若者と相談してキジムンの住処を焼くことにする。
四　若者がキジムンを遠い海に漁に誘った留守に、妻が火をつけると、キジムンは「家が焼ける匂いがする」と言うが、若者はそのまま漁を続けさせる。帰ってきたキジムンは、住処も目の悪い子供も焼けてしまっていたので、悲しんで去る。
五　数年して若者が那覇へ豚を売りに行き、ウスク木の陰で休んでいると、友人が通りかかったので、声をかけ話をしているうちにキジムンの住処を焼いた話をしてしまう。木の上にいたキジムンがそれを聞いて、「大事な子を殺したのはお前だったのか。必ず仇を討つ」と言ったので、若者は急いで家に帰るが、すでに家は焼け妻子も焼き殺されていた。

この結末ではキジムナーの家を焼いた人間は仕返しとして、自分の家を焼かれ、妻子の命を奪われてしまう。神聖な場所を汚したために災いが降りかかるということだ。

結末三(a-3）
キジムナーは青年の家を離れ、青年の家は没落する。

キジムナーの住処である木を焼いたことにより、キジムナーがその人間の家から離れ、その家は没落する、ということであり、この場合、キジムナーが福の神的、あるいは座敷わらし的な存在としてとらえられていることは注目すべきであろう。[3)]

宜野湾市新城

一　爺がキジムナーと友達になると、キジムナーは毎晩爺を誘いに来て海に行き、
二　捕った魚の左目だけ食べてあとは爺にくれる。
三　爺は毎晩起こされるのが辛くなり、
四　キジムナーの住むビンギの木に火をつける。
五　キジムナーは「熱田比嘉へ」と言って去り、爺の家はつぶれて熱田村の比嘉は金持ちになった。

「b　キジムナーの苦手な蛸を家の入り口に釣るし、鶏の鳴き真似をする」という場合も、結末は主に三つに分かれる。

結末 b-1
自分を払おうとした人間に対して、キジムナーはその人間を「殺さなければならない」と言って、三日後にその人間は死んでしまう。キジムナーが人の命を奪う場合、たいていの場合は直接的な行為（焼き殺す、海に突き落とすなど）による殺害なのだが、この場合は、「魂（まぶい）」を捕ることによって人間の命を奪うのである。この変形話として、魂をとる存在としてのキジムンがある。魂とキジムナーについての話はⅡ-４にて詳しく述べる。

具志川市安慶名[4)]

キジムナーは昼は眠り、夜は海へ魚を捕りにいった。いつも一人で魚を捕りに行く爺がキジムナーと友達になり、毎日魚を捕ってもらう。爺は魚を売って金がたまったのでキジムナーがうるさくなり、キジムナーに「怖いものは何か」と聞く。キジムナーが「たこと夜明けの鶏だ」と言うと、爺はたこを門に下げ、布をかぶりびろうの葉の扇を二つもって、屋根の上でしゃがんでキジムナーを待つ。キジムナーが来ると、爺は扇をパタパタさせて、「タッタエーキ」と鶏の鳴き真似をするが、キジムナーは目がよく、爺だと見破る。キジムナーは「爺を殺さねばならない」と佳い、爺は三日の間に寝たまま死んだ。

主に夜に活動をするキジムナーに対して、鶏の鳴き真似をする行為は、鶏の鳴き真似をして魔物（鬼）に朝が来たことを告げ、退散してもらう呪的行為を思い起こさせる。

結末 b-2
この場合は、キジムナーの嫌いなもの（蛸など）をつるしたことによって、人間がキジムナーから仕返しを受けるという話である。

具志川市喜屋武[5)]

毎日海に魚を捕りにいく爺が、潮が引くのを待って浜で寝ていると、キジムナーが来て、「友達になってくれ」と頼むので承知する。キジムナーは魚をよく捕り、左の目玉だけをくりぬいて爺にくれたので、爺は金持ちになる。爺はキジムナーがあまり誘いに来るので、「お前の一番怖いものは何か」と聞き、キジムナーが「たこだ」と答えると、家の前にたこをぶら下げておく。キジムナーは爺の家には入れなくなり、もう一人の人間の友達に「爺の家のたこを捕ってくれ」と頼む。たこを捕ってもらうとキジムナーは爺の家に入り、爺に「私が魚を捕って金持ちにしてやったのに、わざと嫌いなたこをつるしたから仕返しをしてやる」と言い、爺はたちまち元の貧乏に戻った。

また、キジムナーの好物が魚の左目であると明記されている場合、蛸を投げつけた人間が家に帰ったところ、子供の目がくりぬかれている、という描写がある。

c の場合、人間はキジムナーに海の中に放り投げられ、おぼれ死んでしまう。

２・キジムナーの身体的特徴

説話に登場するキジムナー以外に、聞き書きの形でキジムナーについて述べられることも多い。その場合は、キジムナーの目撃譚の形を取ることが多い。[6)]

キジムンは赤色の子供である、髪毛をたれて居る。アカ、カンター、ワラバである。
キジムンは大変にいたづら好きである。
夜灯りを持って歩いていると、その日をとって逃げることがある。それ故に、夜燈灯（ママ）の火をキジムンに捕られまいと思へば、予めそれを跨いでおかねばならぬ。
原因の知らぬ火が夜見えるのはキジムンの火である。俗に此をキジムナビと云って居る。
爪に円い黒い傷が出来ることがあるが、此はキジムンにお灸を据えられたためだと、俗に此をキジムナヌヤーキューと云う。
大雨の時など、流水の中に変な泡が立つことがあるが、此はキジムナの唾であると。
魘される（うなされる）のはキジムンに襲はれるのである。キジムンは戸の隙穴から入ってくると、それ故にススキでサン（Knotenzauber)を結んで此を胸に乗せておけば、魘されることはないと。

また、キジムナーに関してこのような話も伝わっている。

女か男かわからないが小さな子供で、真っ赤なちぢれ毛を垂らし猿に似ている。キジムナーは山から火を盗みに下りてくる。夜中の十二時から一時頃よくあらわれる。キジムナーと友達になると毎晩海に連れて行かれ、必ず大漁になった。ところがどの魚も片目は取られている。大の字形になって寝るときはキジムナーに二，三分ぐらい圧迫され、意識はあるが、身動きすることができず、またキジムナーが来るときはウーとかすかな音がする。[7)]

土地によって「ブナガヤ」「セーマ」など、呼称はさまざまだが、その仕業は共通する。夜の戸の隙間から入り込み、寝ている人を押さえつけ苦しめるのである。寝ている人は、気付いているが体が動かず、金縛りにあったようだという。おもしろいことに、男の人を襲うのは女のキジムナーで、大きな乳房で押さえつけるというのである。[8)]

このようにキジムナーは寝ている人を押さえつけるというのだ。折口信夫は「座敷小僧の話」においてこの話に触れており、「座敷わらし系統の系統のものらしい」としている。それを引用した辻は、枕返しの話は座敷わらしとキジムナーくらいにしか見られないとも付け加える。[9)]

これは様々な聞き書きの形を総括したものであるが、ここには説話には現れない詳細なキジムナーについての記述がある。たとえば、赤毛であることや、キジムナー火を発すると云うことは、このような単発の話でしか見ることはない。

おもしろいことに、今、キジムナーについて知る人の多くが上記の事項を意識しているということである。赤毛の子供の姿ということから、愛くるしい妖怪をイメージすることが多いようだ。

（注釈）

１）稲田浩二，小澤俊夫『日本昔話通観 26　沖縄』，同朋舎、1977-1998，132 頁。
２）同上、134 頁。
３）同上、132 頁。
４）同上、133 頁。
５）同上、134 頁。
６）佐木真興英「キジムン--植物に関する話」『南島説話』郷土研究社　1922 年
７）辻雄二「キジムナーの伝承　–その展開と比較-」『日本民俗学』179 号，日本民俗学会、1989 年，114 頁。
８）宮田登『ふるさとの伝説　四　鬼・妖怪』，ぎょうせい、1990 年，154-155 頁。
９）前引、辻雄二「キジムナーの伝承　–その展開と比較-」『日本民俗学』179 号，日本民俗学会、1989 年，114 頁。

［II］キジムナー説話を巡って

１・目玉とキジムナー
２・火の玉、ヨーカビとキジムナー
３・魔除けとキジムナー
４・魂をとるキジムナー

１・目玉とキジムナー

キジムナーに関する話を読んでいると、目に関する記述が散見されることに気づく。

キジムナーと一緒に漁にいくと、キジムナーは魚を捕り、その左目だけを食べてあとは人間にくれるので人間は裕福になる、という記述が多く見られる。

たとえば、結末 a-1 では、後日、青年がキジムナーによって盲目にされ、さらに以後、その家系では眼病の者が出やすいという点であろう。この目ということに注目するならば、キジムナーが「魚の左目」を好物としていることに思い至る。また、話によっては、人間がキジムンの家を焼いた時、一緒に「盲目であるキジムンの子」を焼き殺すという一文が挿入されることがある。

このように、キジムナーに関する話には「目」という要素が多く出てくるが、それが何を意味するのかはわからない。柳田国男が天狗と山の神との関係について簡潔に記しているのみだ。[1)]

> また天狗様は魚の目が好きだと言ふ話もありました。遠州の海に近い平地部では、夏になると水田の上に、夜分多くの火が高く低く飛びまはるのを見ることがある。其れを天狗の夜とぼしといって、山から天狗が泥鰌を捕りに来るのだといひました。そのことがあってからしばらくの間は、溝や小川の泥鰌に目のない者がいくらもゐたさうで、それは天狗様が眼の玉だけを抜いて行かれるのだといってゐました。これと同じ話は沖縄の島にも、又奄美大島の村にもありました。沖縄ではきじむんというのが山の神であるが、人間と友達になって海に魚釣りに行くことを好む、きじむんと同行して釣りをすると、特に多くの獲物があり、しかも彼はただ魚の眼だけを捕って、他は持って行かぬから、たいそうつがふがよいといふ話もありました。

実は当初私はこの実に簡潔に書かれた柳田の文章、すなわち「キジムナーは山の神である」というくだりを軽視していた。だが、後述するように、キジムンが天狗と同じように、キジムン火という火を放つ存在である点、また、天狗と同様に目玉を好むという点、さらには、奄美大島のケンムンや、九州の河童などについて、この話と同じものが存在することを考えると、この文は重要な点を突いていると言わざるを得ない。

つまり、キジムナーが山の神としての性格を持っていたのではないか、ということだ。

この点については後ほど「山の神」の項目でまとめて述べることにする。

また、この話から想像できることとして、この話が語られた場所に置いて、集落の中の家に眼病の者が続いたとき、その災因として先祖がキジムナーに悪さをしたという考えを採ることが可能だということだ。

さらに、以下のような話もある。[2)]

あぬ、フィジムンが、るくフィージャーぬ目玉ん抜ぢかー，片目（はたみー）抜ぢすんばーんあい、また、二（たー）ちん目抜ぢかー丸死なしすんばーんあいてーとぅ、ふぬ、るく、不思議思（うむ）てぃかー、
「何（ぬー）んち、あんし、何（ぬー）ぬふんぐとぅフィージャーぬ目玉（めんたま）抜ぎがやー」んりち、年寄りの方やしかとぅ珍（ぶんま）はさびてぃかー、
「なー、ふり確か、フィジムナーがるする。フィジムナーがる貝ぬ目玉（めんたま）ん抜ぢゃい、また、色んな何うふいティンチャマ事すーとぅ、なー確かふりフィジムナーがする仕業るやしが」んでぃちから。

あの、キジムナーが、あんまり山羊の目玉を抜いてから、片目を抜くときもあり、また、二つの目を抜いてから全く殺してしまうときもあったので、その、あんまり不思議に思ってから、
「何で、そんなに、何がこのように山羊の目玉を抜くのかねー」と言って、年寄りの型はたいそう珍しくなされてから、
「もう、これは確かにキジムナーがしている。キジムナーが貝の目玉も抜いたり、また、いろんな何もかもいたずらごとをするから、もう確かこれはキジムナーがする仕業であるのだが」と言ってから。

後述するが、キジムナーと何らかの関係があるとされる奄美大島のケンムンについてもその話が散見される。

このようにキジムナーに関する話には必ずといっていいほど、目に関する話が登場する。これがどのような理由によるものかを即断するのは難しい。だが、ここではひとまず、山の神、目玉、というキーワードを抑えておき、後々考察してみることにする。

（もっとも、キジムナーに関する論考を整理した辻によれば、その伝承を伝える共同体の環境によって、このキジムナーの好物が若干変化することもあるという。例えば、本島北部の本部町伊野波ではキジムナーの呼称は「シューマ」に変化し、好物も蜩（ひぐらし）や川海老とされているという）[3)]

２・火の玉、ヨーカビとキジムナー

キジムナーはキジムナー火という火を出す存在だという。たとえば、夜、海上や田んぼの上を火の玉が飛んでいると、これをキジムナー火といって、魚の目玉やカタツムリをとっているといわれるそうだ。そして、翌朝キジムナーの休んだとされる場所を見ると、焦げたようになっているという。[4] 火をつけているとキジムナーがよってくることがある。たとえば、夜線香を振るとキジムナーがその火をとりにきたり、夜灯りを持って歩いているとその火をとって逃げることがあるという。また、爪に円い黒い傷が出来ることがあるが、これはキジムナーにお灸を据えられた跡だという。これをキジムナヤーキューというのだそうだ。[5]

さらに、松谷みよ子は子供向けの本に以下のように記している。[6]

> 沖縄の読谷村に、タケさんというおばあさんがいて、ちいさいとき、キジムナーをからかってあそんだそうだ。キジムナーっていうのは、かっぱの仲間といったらいいのかな、沖縄にいる妖怪だよ。
>
> タケさんが十歳くらいのとき､サトウキビ畑の間にむしろを敷いて夕涼みしながら、
>
> 「キジムナー、からかってやろう」
>
> って、みんなでね、むしろにひっくり返って足をばたばたさせながら
>
> 「キジムナー、サーターカマヒー（サトウやろうよー)」
>
> っておいでおいでをすると、ろうそくの火のような、ぼんやりした火の玉がやってくるんだって。田んぼのむこうにキジムナーのすんでいる木があって、そこからやってくる。
>
> その火が、ゆっくりゆっくり、だんだん近づいてくると、タケさんたちは急にこわくなって、
>
> 「クスクエー、カンチリ（くそくらえ)」
>
> ってさけぶとね。ぱっと火は消える。火はみえてもすがたはみえないけど、よべばかならずキジムナーの火はやってきた。なんべんもよぶと、いくつもいくつも火がともることもあって、こわかったって。

このようにキジムナーと火は大変関係が深い。ここにあげた話以外にも、前項に掲げた話について考えてみれば、キジムナーのすみかは火によって焼かれ、人間に仕返しをするキジムナーは燃えさしでもって人間の目を焼いている。

これについて辻雄二は「異郷のものと火の関係が深いことは、すでに多くの研究者によっていわれているところである」とし[7]、河童との関連性を指摘している。たしかに、九州の河童をはじめとして、奄美地域のケンムンなどにも火との関連性が見られる。

しかしながら、私としては即座に一般的な結論を提示する前に、もうすこし沖縄における火というもの、もうすこし言えば、火の玉がその世界においてどのように認識されているか、ということについて考えてみるべきだと考える。火について考えることにより、火と関連づけられることの多いキジムナーの性格までもあぶりだす可能性があると考えるからだ。

沖縄各地では旧暦八月に「妖火日（ヨーカビ）」、「現見（アラミ）」という祭が行われる。
たとえば、宮古島平良地区においては、８月８日～１５日まで、神事と併存した仏事として「ヨーカビー」が行われるという[8)]。このうち９日と１１日には、ヒーダマ、イニンビ、インネンビ、タマイといった「妖火」が縁起の悪いところと言われる「墓地・旧集落跡・森」などに出現。人々は出かけ小屋を造って妖火見物（アラミ）をするという。渡辺はこれを「葬送儀礼に通じる」とし、部落の者たちは「妖火は死霊の来訪を意味する」と語っているという。さらに、亡霊の来る方向も海上東方であり、妖火が現れるのは墓、森などの聖界との接点であることから、これは悪霊来訪・防除・放念祈願と神人交代を意味しているとする。この構造は盆行事と非常によく似ており、悪霊・善霊が境から村に進入し、これを歓迎し、また防除するために、踊りを以て、慰霊するという。この妖火を祖霊であると伝えているところも多いという。[9)]

実はこのヨーカビがキジムンと関連づけて伝えられているところもある。
たとえば、大宜味村では旧暦八月には山中に小屋がけをしたりして、その出現を待ち続けた。いった豆を食べたりしながら、大人も子供もブナガヤを見ようと夜を徹した。この行事を「アラミ（現見）」といい、かつては盛んに行われたという。」[10)]
また、"大宜味村喜如嘉の屋号「古浜屋」という家では、毎年八月八日の妖怪日（よーかび）（ママ）に必ずキジムナーがやってきて、豚を綱で縛り上げ、持っている火でところかまわず焼いたという。喜如嘉では、戦前までこの妖怪日には見張り小屋を建て、若者達がキジムナー火を追いかけ火事にならぬようにした"という。[11)]

このヨーカビは宮古以北に多いとされるが、このヨーカビに現れるという火の玉は一般的には「祖霊」とも「悪霊」とも解釈されており、この火の玉がはっきりとキジムナー火であるとされている地域は大宜味村周辺でしかない。ゆえに、このヨーカビの火の玉が全てキジムナーであるということはできないが、しかし、この火がキジムナー火であると伝えられている地域ではキジムナーが悪霊の一種として認識されていた、ということが言えるだろう。

３・魔除けとキジムナー

キジムナーを追い払うということが「魔除け」なのであるならば、前章で掲げた全ての話が「魔除け」になる。
「魔よけ」の行為を整理するならば、

・キジムナーの住む木を焼く
・キジムナーが家に入ってこられないように、家の入り口に蛸をつるす。
・鶏の鳴き真似をする。
・キジムナーの目の前で屁を放つ。

ということである。

この中でまずはじめに注目したいのが、入り口に蛸を吊す、ということについてであるが、この蛸が沖縄においてどのような役割を担っているのか見つけだすことはできなかった。この件については今後も引き続き検討する必要があるだろう。ただ、奄美大島に住むキジムナーとよく似た特徴を持つケンムン（後述）の由来譚の一つに以下のようなものがあり、その中で蛸についての記述が見られる。ケンムンは月と太陽との私生児で、それゆえに天には置けず地上の岩礁に置いた。そこへ蛸が来て、ケンムンをいじめたので、太陽に住む場所を変えるように頼むと、それなら藪に住めと命じた。それでケンムンはアコウの木やガジュマルの木に住むようになったという。どちらが先に語られた話かは分からないが、ただ、気にとめておく必要はあるだろう。

さらに、鶏の鳴き真似をするということは、鶏が鳴くことで鬼達が去っていくいくつかの昔話が想起させられることは言うまでもない。

屁を放つ、という項目であるが、それと関連するものとして、「糞」というものがある。それについて示した「呪文」がある。

山里純一によれば、キジムナーを避けるための呪文として以下のようなものがあるという。[12)]

・キジムナーを呼ぶ時

Jshi n nī nu Kama
Ūti ku yo
Sata kwira

石ン根のカマ ついて来い 砂糖をあげよう・・・・

・キジムナーを退ける時

Jshi n nī nu Kama
Ūti ku yo
Sata kwe Kamafi
Kaji gusu
Funi haki watasui sasa

石ン根のカマ ついて来い 砂糖をあげよう 枯れ糞でも 噛み切りやがれ 儀方々々

この「カマ」という言葉について、佐木真はキジムンはカマ（琉球人の童名）名である都している[13)]。

さらに、佐木真によれば越来村では、夕方口笛を吹くとキジムンが出てくるという。

・キジムナーを退ける時（山原地方）

ナムアミダブツ　ミダブツ　ミダブツ　ミダブツ

また、松谷みよ子によれば、キジムナー呼びの呪文として、

「キジムナー、サーターカマヒー（砂糖やるよー）」というものをあげている。[14)]

４・魂をとるキジムナー

沖縄各地ではキジムナーが魂（まぶい）をとる存在として書かれることがままある。たとえば、それは第一章であげた説話の結末ｂなどである。結末ｂでは、人間がキジムナーを遠ざけようとしたために、キジムナーの怒りを買い、キジムナーが人間の魂を奪うのである。

このキジムナーが直接魂を奪う話として、宮古島では、以下のような話が伝えられる。[15)]

キジムン霊を取る話

昔、ある人がキジムンと友人になった。二人連れ立って漁に出かけた。キジムンは魚類タコ類をとるのが大変巧みだったが、その利得は彼の友人が占めた。又、ある日二人が散歩したらキジムンはある家の門口で一寸立ち止まり「少しこの家に入って人の魂を取ってくるから一寸待って！！」と云って、サッササッサと入っていったかと思ふとすぐ出てきた。白紙に魂を包んで持っていた。しばらく歩いて二人は色々話し込んだ。キジムンは魂包を石垣の上に置いて無駄話をした。然るに彼らがその場を去るとき、キジムンはその包みを置き忘れたので、友人はそっとそれを懐に入れて知らぬ振りして家に帰った。その翌日になった。彼は昨日キジムンが立ち寄った家の娘が命旦夕に迫っていると聞いた。この家は近在きっての富豪であった。彼は早速行って主人にあって言ふ様「聞けばお嬢さんはだいぶ御危篤だと云ふことだが、一つ私治してあげませうか」主人「それは辱けない」彼「しかし報酬には何を下さる？」主人「イヤ、何でも差し上げる、娘は無論家の財産、凡て差し上げる」と云ふ。彼は「それでは今治して上げませう」と云って、昨日の白紙包の魂を娘の胸に押しつけ、なにやら呪を唱へた。すると娘はたちまち全快し、彼は娘と富豪の全財産をもらった。

この話では実に直接的にキジムナーが魂を奪う存在であることが明記されている。もっとも、この話自体は他のキジムナー譚とはだいぶ異なり、説話的な色合いが非常に濃い。従って、魂をとる存在としてのキジムナーを設定に活かした、変形型の話ということもできよう。

注釈

１）柳田国男「片目の魚」『定本柳田国男集 26』，筑摩書房、1964 年，177 頁。
２）遠藤庄治「国頭村の昔話」『南島昔話叢書４』，同朋舎出版、1990 年，183 頁。
３）辻雄二「キジムナーの伝承　–その展開と比較-」『日本民俗学』179 号，日本民俗学会、1989 年，108-109 頁。
４）宮田登『ふるさとの伝説　四　鬼・妖怪』，ぎょうせい、1990 年，155 頁。
５）佐木真興英「キジムン--植物に関する話」『南島説話』郷土研究社　1922 年，（南島妖怪考 301 頁）
６）松谷みよ子『キジムナーの火、ケンムンの火』ほるぷ出版，1997 年，73-74 頁。
７）前引、辻雄二「キジムナーの伝承　–その展開と比較-」，113 頁。

８）渡辺欣雄『沖縄の社会組織と世界観』，新泉社、1985 年，309 頁。
９）同上、194 頁。
１０）朝日新聞社　2000 5.20 朝刊　東京版 37 頁。
１１）宮田登『ふるさとの伝説　四　鬼・妖怪』，ぎょうせい、1990 年，155 頁。
１２）山里純一『沖縄の魔除けとまじない』，第一書房 、1997 年，209-210 頁。
１３）佐木真興英「キジムン--植物に関する話」『南島説話』郷土研究社　1922 年，（南島妖怪考 301 頁）
１４）松谷みよ子『キジムナーの火、ケンムンの火』ほるぷ出版，1997 年，73-74 頁。
１５）前引、佐木真興英「キジムン--植物に関する話」『南島説話』郷土研究社　1922 年，（南島妖怪考 301 頁）なお、文中では宮古島で採集されたとの断り書きは見あたらなかったが、前引の、辻雄二「キジムナーの伝承　–その展開と比較-」『日本民俗学』179 号，日本民俗学会、1989 年，112 頁の記述より、宮古島の伝承と判断した。

［III］沖縄周辺地域を巡って

１・ケンムン（奄美大島）

キジムナーについて語られるとき、奄美大島に住むというケンムンについて言及しないわけにはいかないだろう。

ケンムンはキジムナーと行動や特徴が非常に似ている一方、奄美ガッパと言って本土の河童に似ているとも言われる。

いくつかの文献をもとに、ケンムンの特徴を挙げてみることにする。

夕方畑へ行ったら、赤い小さな子供があっちへ走り、こっちへ走り、木の葉が飛ぶようにして走っていた。頭はおかっぱ頭だった。これがケンムンだった。（話者　徳之島町轟・池田豊良）

ケンムンの体格は小さい子供ぐらいで、頭の毛が真っ赤で足が長く、臭いは青臭い。口から涎を出すが、その涎が明りに見える。（話者　伊仙町上面縄・徳永光子）

ケンムンは赤髪で、いつも鼻を垂らしている。口から泡を吹いて、それが火になって漁りをする。足はタケのようなもので、二尺くらいである。（話者　伊仙町伊仙・吉岡徳盛）[1)]

ケンムンは体が小さく、赤子のようだとも、二、三歳の子供のようだともいわれている。全身に赤い毛が生えているが、肌はヌルヌルしているという。頭はおかっぱで、髪の毛も赤い。徳之島ではこのことから、髪の赤い子を「ケンムンぬ子」と呼ぶ。顔は、猿にも猫にも似ているといわれ、はっきりしない。しかも、なんにでもばけることができるというので、いよいよはっきりとしない。手足は長く、竹のように細い。座るときは必ず膝を立て、頭を挟むようにしてすわる。奄美大島では立て膝ですわることを「ケンムン座り」といってきらう。

また口からいつもよだれを垂らしていて、泡を吐いたりする。山などで木の枝によだれのようなものがついているのを見かけたら、そこにはケンムンがいると言われる。寒い夜などは、塩田季語屋や、サトウ炊きゴヤにやってきては、火に当たっていることが多く、人間が悪さをしなければ危害を加えることもない。しかし相撲が大好きなため、よく人に挑んでくる。人間が勝つと何度でもとろうと言い、ついには仲間が次々とやってきて終わりがない。だからケンムンと相撲を取る前に必ず「おまえとだけなら」と約束しなければならない。[2)]

そのほかにも、ケンムンの住むところはガジュマルやアホギの木であると書かれていることも多い。頭が河童と同じように皿になっているとの記述も見受けられる。さらに、人間の漁を手伝うこともあり、その際は魚の左目だけを抜いてあとは人間にくれるのだという。また、火の玉はケンムンマチと呼ばれ、田んぼにいる人を囲んだりするという。[3)]

また、ケンムンは季節によってすみかを移動するという。徳之島においては四月、五月のころに、雨の降る夜に山の尾根伝いにケンムンマチという火を無数に灯るという。そし

て、尾根をくだり、海に入る直前で遅くになり、次第に火が一カ所に集まってそろったところで海に入り、その瞬間、海一面に日の光が広がるという。[4)]

こうしてみると、ケンムンとキジムナーには少なからず共通する項目があるといえる。まず、赤い髪を持つこと、子供の姿であること、人間に近い場所にいること、魚の目玉が好物であるという木の精として扱われていること、そして、ケンムン火という火を発することなどである。さらに、ケンムンに悪さをした人間が、ケンムンに目玉を抜き取られたという話もある。これらを見るだけでも、ケンムンとキジムナーがかなり近い関係にあることは容易に想像できよう。

だが、このケンムンとキジムナーには決定的な違いが存在する。それは、ケンムンにはキジムナーにはない確固とした由来譚と、キジムナー以上に豊富なバリエーションの説話が存在しているという点である。

代表的なものは、ネブサワという人間がケンムンになったというものだ。

昔々、島にネブザワとユネザワという二人の漁師がいた。ユネザワには美しい妻がおり、ネブザワはそれをいつもうらやんでいた。

ある日、二人はいつもと同じように船を出し漁をしていたが、いざ帰ろうとしたとき、碇が珊瑚礁に引っかかり、とれなくなってしまった。そこでユネザワは、碇を取りに海に潜った。ところが、船で待つネブザワ海からあがってきたユネザワの頭を櫂で殴りつけ、殺してしまった。

海から戻ったネブザワは、ユネザワの妻にはユネザワは鮫に食われて死んだと伝え、必死になぐさめた。

葬式もすみ、やがて四十九日がやってきた。その日、妻が一人で浜に行くと、波打ち際にネブザワの遺骸が打ち上げられていた。遺骸には鮫に食われた痕はなく、殴られた痕だけがあった。しかし、そのことは誰にも云わず、親戚の者に頼み墓へ葬った。

それから半年あまりすぎ、ネブザワは、ユネザワの妻に結婚を申し込んだ。彼女は静かに、

「私が望む家が建てられたら」

という条件を出した。さっそくネブザワは、ユネザワの妻と山へ行き、大きな木を探した。奥深い山中で大きな木を前にした妻は、ネブザワに手を回し太さを計るように言った。ネブザワが手を広げ木を抱えたとき、反対側に回った妻は、ネブザワの手に、隠し持っていた釘を金槌で力の限り打ち込んだ。

「夫の仇、ひと思いに殺すより、このほうが夫の恨みも晴れることでしょう」

と告げ、妻はその場を立ち去った。

やがて、取り残されたネブザワは苦しさのあまり気を失った。すると突然、あたりが明るくなり神様が現れた。

「おまえは、ユネザワを殺した以外は悪いことをしていないので、助けてやろう。しかし人間にはしておけない。半分は人間、半分は獣にする。今後、里におり、人に悪さをするな。そのかわり、水の中は自由に動き回れるようにしてやろう」

と告げた。

朝になり、ネブザワが気がつくと、体は自由になっていたが、その姿は毛が体中に生え、手足がやたらと長い奇妙なものであった。それ以後、昼は木や洞窟に隠れ、夜だけ出歩いたということである。

これがケンムンのはじまりである。今も島では、家の外でネブザワの名を口にしてはならない。ケンムンが元の自分の名を聞くのを嫌うからである。[5)]

ケンムンが元は人間であるという説話はキジムナーに関する説話では全く見受けられないものだ。
元が人間だとする説話は他にもあり、孤児の姉弟が山の爺の助言に従って、山と川と海を往復するケンムンになったというものや、姑と夫にいじめられた妻がガジュマルの木に五寸釘で打ち付けられ、この魂は神様になれずにケンムンになった、というものある。[6)]

人間以外の由来を説明する説話も多数存在する。

ケンムンは月と太陽との私生児で、それゆえに天には置けず地上の岩礁に置いた。そこへ蛸が来て、ケンムンをいじめたので、太陽に住む場所を変えるように頼むと、それなら藪に住めと命じた。それでケンムンはアコウの木やガジュマルの木に住むようになったという。[7)]

ケンムンの頭のテンゴ（天狗）の神が、もともと藁人形で作ったというものもある。

昔、人間のふりをしていた大工神（テング神）が、村にいて、やはり人間の女性のふりをしていた天女に恋した。大工神が求婚したところ、「一日で家を完成させたら結婚してあげる」といわれたため、二千体の藁人形を作り息をふきかけて人間にした。その後、約束どおり二人は結婚するが、数年後に天女が己の正体を明かすと大工神も自分の正体を明かし、二千体の人間を元に戻そうとしたところ、それが全部ケンムンになったという。そのうちの千人は山に放し、残りの千人は海に放した。七月ごろになると、ケンムンが海から山に登るのだという。[8)]

まずこのようにケンムンに関する説話はキジムナーに関する説話に比べて圧倒的にバリエーションが豊富である。前章であげたキジムナー譚は系統立てて整理することができたが、ケンムンに関してはそれは不可能だろう。それだけではなく、近現代においても「目撃談」がまことしやかに語られる。1997 年 11 月 11 日の大島新聞のコラム欄においても、同年一月の目撃談が伝えられているのだ。[9)]

とはいっても、沖縄本島のキジムナーが奄美大島のケンムン譚に影響を与えたことは間違いないだろうし、また、その逆もあっただろう。キジムナーに比べて奄美のケンムンがいきいきしているぶん、キジムナーについて考えるときにケンムン譚は参考になる部分が多いと思われる。このケンムンの由来譚とキジムナー譚を相互補完的に考えることによって、本土の河童との関連をも考えた総合的な考察が可能になるのではないか、と予想される。

２・マジムン（宮古島）

本によってはキジムナーに関する項目にまとめることも多いが、第１章にて掲げた説話とは大きく内容が異なり、また宮古島という地域特性のことを考えると、周辺地域の類話譚として考えた方がよいと思われる。

疫病とキジムナー

先に掲げたキジムナーに関する様々な説話だが、宮古に来ると、この話が若干変形され、疫病について触れるものが多くなる。

キジムナーと共通する点は、人間と魔物が友達であったこと。人間が一方的に魔物を裏切ったために、魔物が人間に復讐するということである。キジムナーに関する話ではこの復讐が人間に眼病をもたらしたり、妻子の殺害であったりしたものが、地域的な背景が大きく影響したのか、宮古周辺では疫病をもたらす、というかたちに変化しているのがおもしろい。

宮古郡苛部村佐和田

伊良部の人がインヤマヤラウというマズムン（魔物）と友達になり海に漁に行くが、マズムンの住処を次々と焼いたので、マズムンは八重山に移り住むことにする。マズムンが「遊びに来い」といったので、男は八重山に行きマズムンの家を捜す。男はマズムンの友達にあってマズムンの家を聞き、「マズムンの家を焼いたのは自分だ」と話す。マズムンの友達がそれをマズムンに話すと、マズムンは男に仕返しをしようと思い、土産に箱を一つ与えて、「家に帰ったら、家族を集めて戸を締め切って箱を開けろ」と言う。男は帰る船の中で皆に「箱を開けて見せろ」とせがまれ、箱を開けると、マラリヤの菌が飛んでいって来間島に着き、島の人は皆死んだ。だから今までも伊良部の人は来間に住めず、嫁取り婿取りもうまくいかない。

宮古郡城辺町

マーガがマズムヌを追い出そうと「マズムヌの家が無くなったから」と言って、変な石の上に立てた家に移らせ、マズムヌが寝ると、家を揺り動かして、「多良間に行った方がいい」とすすめる。マーガはマズムヌが居なくなったので退屈して多良間に行き、マズムヌの妻と知らず、芋を洗っていた女に「私が悪巧みして多良間に行かせたマズムヌの家はどこか」と尋ねる。マズムヌは妻から話を聞き、マーガが帰るときにマラリヤなどいろいろな病気の入った箱を持たせる。途中で海が荒れ、船は沈むが箱はスサカ田にながれついたのでそれからマラリヤ病などが発生した。[10)]

ここで注目しなければならないのは、人間がマジムンを裏切った結果、マラリヤなどの病がもたらされるという、その共同体自体を壊滅に追い込むという非常にシビアな結末を迎えている点である。その他のキジムナー譚においては、キジムナーを裏切った人間一人だけが犠牲になり、しかもそれは盲目になったり、財産を失ったりという程度であった。

八重山諸島では戦後までマラリアが風土病として猛威を振るっており、数多くの人々の命を奪ってきた。それ故に疫病をもたらすのが悪霊であるという考えが出てきたと考えられる。

マラリヤが身近な脅威として存在していたここの地域において、その災因として、疫病をもたらすという「凶暴化したマジムン」を想定していることは注目すべき点でろう。

なお、疫病が船に乗って移動する、という点は台湾や中国福建省の王爺祭や、朝鮮半島のソンニム、ヨンガム、トッケビなどを連想させて興味深い。

王爺信仰においては疫病神としての「瘟神」がその背景にあり、疫病を船に乗せて流してしまう、というのがその原型であるらしい。この地域では疫病は船に乗ってやってくる、もしくは神が船にのっけて疫病を持っていくという思考があると思われる。その船に乗った疫病という思考が宮古のマジムン譚に見られることは興味深い。

１）福田晃「木の精由来譚の位相」『南島説話の研究』，法政大学出版局、1992 年，353 頁。
２）宮田登『ふるさとの伝説　四　鬼・妖怪』，ぎょうせい、1990 年，153 頁。
３）松谷みよ子『キジムナーの火、ケンムンの火』ほるぷ出版、1997 年，73-74 頁。
４）宮田登『ふるさとの伝説　四　鬼・妖怪』，ぎょうせい、1990 年，153 頁。
５）同上、152 頁。
６）前引、福田晃「木の精由来譚の位相」『南島説話の研究』，357-358 頁。原典は田畑英勝「ケンムンとテンゴの神」『奄美大島昔話集』，岩崎美術社、1975 年によるもの。
７）同上、374 頁。原典は登山修「奄美説話抄（二)」『昔話－研究と資料』第六号，三弥井書店、1977 年によるもの。
８）同上、355-356 頁。原典は田畑英勝「ケンムンとテンゴの神」『奄美大島昔話集』，岩崎美術社、1975 年によるもの。
９）城利文「シマぬケンムン物語」大島新聞，平成九年十一月十一日号。
１０）稲田浩二，小澤俊夫『日本昔話通観 26　沖縄』，同朋舎、1977-1998，137-138 頁。

［Ⅳ］キジムナーの由来、過去と現在

前章まではキジムナーを中心に、それぞれの説話について考察してきたわけだが、ここでは前章までの話を統合し、マクロ的な視点に立って、沖縄の世界観とキジムナーとの関連、そして、現在のキジムナーについて考察してみることにする。

１・琉球弧の神信仰

琉球に住む人々の信仰体系は大きく二つに分類できるという[1)]。それは「固有信仰」と「伝来信仰」で、「固有信仰」は大自然物にはシー（魂（タマシー）が宿っている、と人々が自然に考えていることだという。そして「伝来信仰」は、琉球に外部から渡ってきた信仰のことで、例えば、仏教・権現信仰・土帝君（主に農耕神）・石敢当（魔除け）・シーサーといったものは外来のものであるという。すなわち、固有信仰とはアニミズムのことであり、そこに仏教など、外来の数々の信仰が伝わったということだ。ただ、中松によれば沖縄は本土に比べれば仏教の影響は非常に少なく、固有信仰が根強く残っている地域だという。その理由として、中松は、沖縄の元来の思想は「死んだ人は神となり子孫を見守る」ところにあるとし、故にあらためて「極楽往生」を願う仏教は不要だからではないか、とした。

では、琉球における神とはどういうものか。たしかに琉球に置いての「神」の定義は非常に難しく、この短文で記述することは無謀きわまりないことであるが、ヨーゼフによれば沖縄の神は二つにわけられるという。一つは祖霊神（滞在神）であり、これは集落の御嶽に一年中滞在する神であり、これが祖霊、つまり先祖神であるという。もう一方は来訪神であり、これはニライカナイから来訪してくる神で、福をもたらすという[2)]。

ここでは先の中松の文を参考にする。神は人間がなしえないことをなす能力、すなわち「セジ」を持っている。そして、他の神に比べて能力が高い神のことを「セジ高い神」というのである。

「セジ」とはなんであろうか。中松によれば「セジ」を用いて人間に福をもたらすのが神であるが、これを悪用し、人間を苦しめるモノは「マジムン」だという。谷川は、セジとは、古代沖縄での信仰の対象となる、霊威であるとし、これは固有の霊威ではなく外部から付着する霊威だという。つまり、セジは人間世界の外に存在すると考えられている非人格的な霊力で、万物（人間・動植物・石・水・土地・・・）と結びついて霊力を発揮するものだという[3)]。

２・ムン

さて、この「マジムン」であるが、一般的に「魔物」として訳され、「ムン」という言い

方もされる。酒井卯作はこの「ムン」について、明の霊魂である「マブイ」と対置される、暗の霊魂であるとする[4)]。

酒井は琉球列島における葬儀に注目し、「死を完成させる」ために必要不可欠なものとして「ムン（モノ）の排除」を挙げている。「ムン」は「悪霊」であり、それは人を病気にしたり、不幸に導いたり、死をもたらしたりするという。

酒井が書くところには、折口信夫は平安時代には「モノ」が魂として見なされ、平安期には幽霊や鬼だと表現され、琉球を含め、次第に正邪に関わりなく全ての魂が「モノ」となったのが、古代の「モノ」である、という主張を展開した。しかし、琉球において折口が示した事例「すぢの守護から力を生じるとして、すぢを言はぬ世には、まぶり（守り）を以て魂を現した。体外の魂、正邪に係わらずものという言ふようになった」については、これに疑問を呈し、「マブイ」が守護霊的存在である、明の霊魂であり、「モノ（ムン）」はあくまで、人に不幸をもたらす暗の霊魂でしかないと反論する。

酒井は悪霊としてのムンがどのようなものかを、沖縄における具体的事例を挙げながら説明する。たとえば、夜間屋内に入り込んだ小鳥は「ヤナムン」として人々は不吉の予兆だと考えて浜に降りて一夜を過ごす例、四辻や分かれ道に出没する「ヒチマジムン」という人を惑わすムンの例、そして、古い大木に住み着く「キジムン」、奄美における「ケンムン」を挙げる。それら「ムン」を防ぐために、南西諸島では建物の入り口に貝をつるしておく風習があったという。さらに、出産時や死人が出るときなどにはムンをその場から必ず払う必要があることを述べている。

３・災因論

もっとも、酒井の書くように、正の霊がマブイであり、邪の霊がムンであると簡単に言い切ることは、あまりにも単純すぎ、無理があるだろう。マブイが人間に害悪をもたらすこともあれば、ムンは人間に害を与えないスピリットとして見なされる場合もある。

たとえば、塩月亮子は「沖縄の死霊観」の中で、沖縄の災因論を「死霊」研究の観点から論じているが[5)]、その中で沖縄本島北部の備瀬の例をあげ、四十九日をすぎてもなお成仏できずにこの世を彷徨う「シニマブイ」とよばれる死霊が、村人に災厄をもたらす悪霊の一種として認識されていることを述べている。

このシニマブイに分類される悪霊として、塩月はヤナカジ（悪風）、ヨーカビーもしくはタンガイ（火の玉）、ユーリー（幽霊）、シーマチチリン（屋敷につく子孫の絶えた死霊）、ユイムン（材木などの漂着物で、溺死者の死霊がついたもの）などを挙げており、シニマブイは様々な姿形をとって人々の前に出現するという。

シニマブイは祖霊になれない、あるいはなる前の他人の霊魂のことであるという。この悪霊化した死者の霊が、マジムンとして人々に災いをもたらすのだ。

つまり、マジムンはシニマブイのうちの一つとして認識されている。

一方、ムンは必ずしも人間に対して害をもたらすものではないと認識されることもある。辻の論文によれば[6)]、伊波普猷は『日本文化の南漸』の中に収められた「君真物の来訪」

において、「君真物」の「物」とキジムンの「ムン」は同じ系統のものであると述べる。そして、「君真物」が海から来訪する海神であることを考えると、キジムンも「もともと海から来たスピリットで、藪の中や大木の上にすみ、人間には少しも害を及ぼさないもの」と論じている。

４・山の神

ムンが悪霊であるか否かの問題であるが、私としてははっきりと断定はできないものと考える。そもそも沖縄の神観念自体が地域によってばらつきが大きく、また、時代の流れによって大きく変化していることと、本来、沖縄でははっきりと善悪が区別されるわけではないことを合わせて考えると、時代によって一つの単語が意味するものが大きく変わることは当然のこととも言える。

そんなキジムナーについて考えるとき、大きな手がかりとなるのは「山の神」というキーワードだろう。辻雄二はキジムナーが赤い髪の毛を持っていることなどから、そこに神性を見いだしている。たとえば、沖縄県池間島のウパルズの神は人間が赤色の物を着けて通ると機嫌を損ねるという例を挙げて、これにキジムナーとの関連性を想像する。[7)]

辻の掲げた、渡嘉敷の民話においては、キジムナーとアカガミという名の神との会話がある。そこで説明書きとして、「アカガミはキジムナーよりも格が上」という記載がある。[7)] さらに、『大宜味の昔話』にて記載されるキジムナー（ブナガヤ）ははっきりと山の神と明記されている。[8)]

> 昔、謝名城村の根神であるお婆さんが山へ薪を広いに行った。そこで身長が一メートルにみたない赤毛者と出会った。その者はどうやら山の御神であられるらしいから。こうしてきた以上は、戻るに戻れない。そこで自分の道具全てを置いて、「今日はこの山に薪取りに来た。ここから戻るわけにも行かないから、一度で薪が沢山とれるところを教えてください。そして無事に帰してください。」とお願いした。するとどこにいったのやら、その赤毛者は消えてしまった。近づいていた場所を確かめると、そこには大きな蟹が一匹いて、そのときになって初めてこれはブナガヤというものだとわかった。仕方なく山を下りようとすると、沢山の薪がある場所に出くわし、無事家に帰り着いた。（昭和五十四年採話）

さらに、前章であげたように、奄美大島のケンムンが神と非常に深い関係を持って書かれていることはこの考えに説得力を与える。ケンムンを作ったのはテンゴの神、すなわち山の神である「天狗」であるということを考えると、キジムナーもまた、山にすむ神性な存在だったと考えられるのだ。

また、キジムナー火を伴って陸と海とを往復する、という事象は、河童を連想させる。

> 河童が年に二度、山と川との間を移動すると言うところもある。鹿児島県ではヒョウヒョウと泣きながら移動するという。そして川にいる間はガンタロであるが、山へ移ればヤマタロになるというように名称が変わる。これは田の神と山の神が春秋に去

来するという信仰にもつながる伝承である。つまり妖怪に零落しても、なお古い信仰の傷痕を随所にとどめているのである。[9)]

キジムナーもケンムンも、山からから海へと移動する。

このように考えてくると、一つの発想が得られる。それは、元来、「神」の属性であったキジムナーは、時が経つにつれてその地位から零落し、妖怪、すなわちマジムンとなったという発想だ。人間になしえない能力を持つ神は「セジ」を持っているが、この「セジ」を悪用するものが「マジムン」だとすれば、本来神であったキジムナーが、零落して魔物となったと考えられる。そして、現在ではこれが無害化した存在になった、つまりスピリットとなったのではないだろうか。

５・屋敷と樹とキジムナー

前項とは別に、キジムナーについて調べていくうちに気になったことは、キジムナーが「屋敷の裏にある老樹に住んでいる」という記述についてである。この老樹はガジュマル、もしくはガジュマルの一種であるウスクガジュマルのことが多い。沖縄ではガジュマルは神木だと見なされることが多く、この木と、この木を持つ屋敷と、キジムナーの関係について考えることも必要だろう。

渡辺欣雄によれば[10)]本来ガジュマルは集落の真ん中に植えられるものではないという。どちらかといえば集落の外れに植えられているという。そのことを考えるとこのガジュマルが植えられた屋敷もまた集落でははずれの位置にあり、そのことに何らかの意味を見いだすことも可能になってくるかもしれない。

折口信夫がキジムナーの枕返しについて言及し、これと座敷わらしとの関連を考えたことは前述したが、この座敷わらしについて考えた場合、家の盛衰と枕返しという面でキジムナー譚と似ている部分があることに気付く。佐々木喜善は『奥州のザシキワラシの話』において「夜中にワラシが来て揺り起こし、また体を上から押しつけたり、枕返しをしたり、とても寝させぬところがある」と記述しており、また柳田国男の『遠野物語』では、

ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門といふ家には、童女の神二人いませりといふことを久しく言ひ伝へたりしが、ある年同じ村の何某といふ男、町より帰るとて留場の橋のほとりにて見慣れざる二人の良き娘に逢へり。物思はしき様子にてこちらへ来る。おまえ達はどこから来たと問へば、おら山口の孫左衛門が処から来たと答ふ。これからどこへ行くのかと聞けば、それの村の何某が家にと答ふ。その何某はやや離れ樽村にて、今も立派に暮らせる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなと思ひしが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸の毒にあたりて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近き頃病みて失せたり。

との話がある。[11)]

キジムナーにしてもザシキワラシにしても、屋敷の中、もしくはすぐそばに居て家の盛衰に深く関わっているという点が非常に興味深い。さらに発想を展開させるならば、彼らを屋敷神として見なすことも可能だということだ。人間がこの屋敷神を裏切る行為を働くことによって、人間はしっぺ返しを食らうことになるということだ。

つまり、今まで人間のために使っていた「セジ」を、人間に害悪を及ぼすために使うのだ。キジムナーは時が経つにつれ、屋敷からは切り離された存在となるのかもしれない。

ただしここで気を付けなくてはいけないのは、家の守り神としてのキジムナーと、山と川を往復するキジムナーにあきらかな性格的な違いが見られる点である。これについてはまとめに記すことにする。

注釈

１）中松弥秀「琉球弧の信仰」『海と列島文化　琉球弧の世界』，小学館、1992 年，299 頁。
２）クライナー・ヨーゼフ，住谷一彦『南島諸島の神観念』，1977 年，未来社 ，17 頁。
３）谷川健一『日本の神々』，岩波書店、1999 年，30 頁。
４）酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』，第一書房、1987 年，299 頁。
５）塩月亮子「沖縄の死霊観－中国・韓国との災因論的比較研究－」『南島史学 41』，1993 年，34-50 頁。
６）辻雄二「キジムナーの伝承　–その展開と比較-」『日本民俗学』179 号，日本民俗学会、1989 年，108-109 頁。
７）同上、108 頁。原典は渡嘉敷村史編集委員会『とかしきの民話』、1978 年によるもの。
８）同上、109 頁。原典は渡嘉敷村史編集委員会『とかしきの民話』、1978 年によるもの。
９）武田旦「河童」『日本民俗事典』，弘文堂、1994 年，154-155 頁。
１０）個人的な意見による。
１１）柳田国男『遠野物語』，角川文庫、1955 年，24 頁。

まとめ

以上のことを考えていくと、どうやらキジムナーには二種類いるようである。すなわち、屋敷のそばのガジュマルの木に住むキジムナーと、山から海へと移動しキジムナー火を発生させるキジムナーである。前者は主に説話型で語られているものであり、後者は口伝で伝えられているものである。前者が屋敷と深い関連を持ち、東北のザシキワラシと似たような特徴を持つ「屋敷神」の性格をもつものであるとするならば、後者は九州、奄美とつらなる河童系統の精霊的な存在だと言えるだろう。本来、別々の存在であったものが、だんだんとひとつのキジムナーという精霊へと姿を変えていった。故に、時が経つにつれ、その性格付けは非常に混乱したものになったと考えられるのではないか。

さらに重要なことがある。それは、他地域との比較ということである。先行研究においては河童や山童、ケンムンとの積極的な比較が行われ、考察が試みられてきたが、それが日本国内にのみしか目が向いていなかったことは指摘すべき点であろう。

沖縄本島に住むキジムナーと奄美大島のケンムン、さらには九州の河童が非常に深い関係を持っているのならば、当然、その関係は海路によって形成されたと考えるべきである。とするならば、台湾や朝鮮半島にも同種のものがいたとしてもおかしくないのではないだろうか。

ただ、それが極めて難しい作業であることは事実である。拙稿においても宮古島の疫病をもたらすマジムンと台湾の王爺信仰について軽く触れたが、しかし、台湾においてキジムナーに似た精霊がいるという話はきくことはなかったし、さらに、朝鮮半島におけるヨンガムやトッケビといった精霊の存在は知れども、それを安易にキジムナーと関連づけることはためらわれた。それをやるならば、まず最初に沖縄に棲む他の精霊の存在や本土の河童とキジムナーとの関連をさらに深く考察する必要があると考えたこともたしかである。

とはいっても、沖縄という地理的条件から考えると、他地域との比較は避けて通れない課題だろう。従来の日本の一部としての沖縄という視点から脱却し、東アジアの一部としての沖縄という視点を得たとき、沖縄研究は新しい段階に踏み出せると考えている。